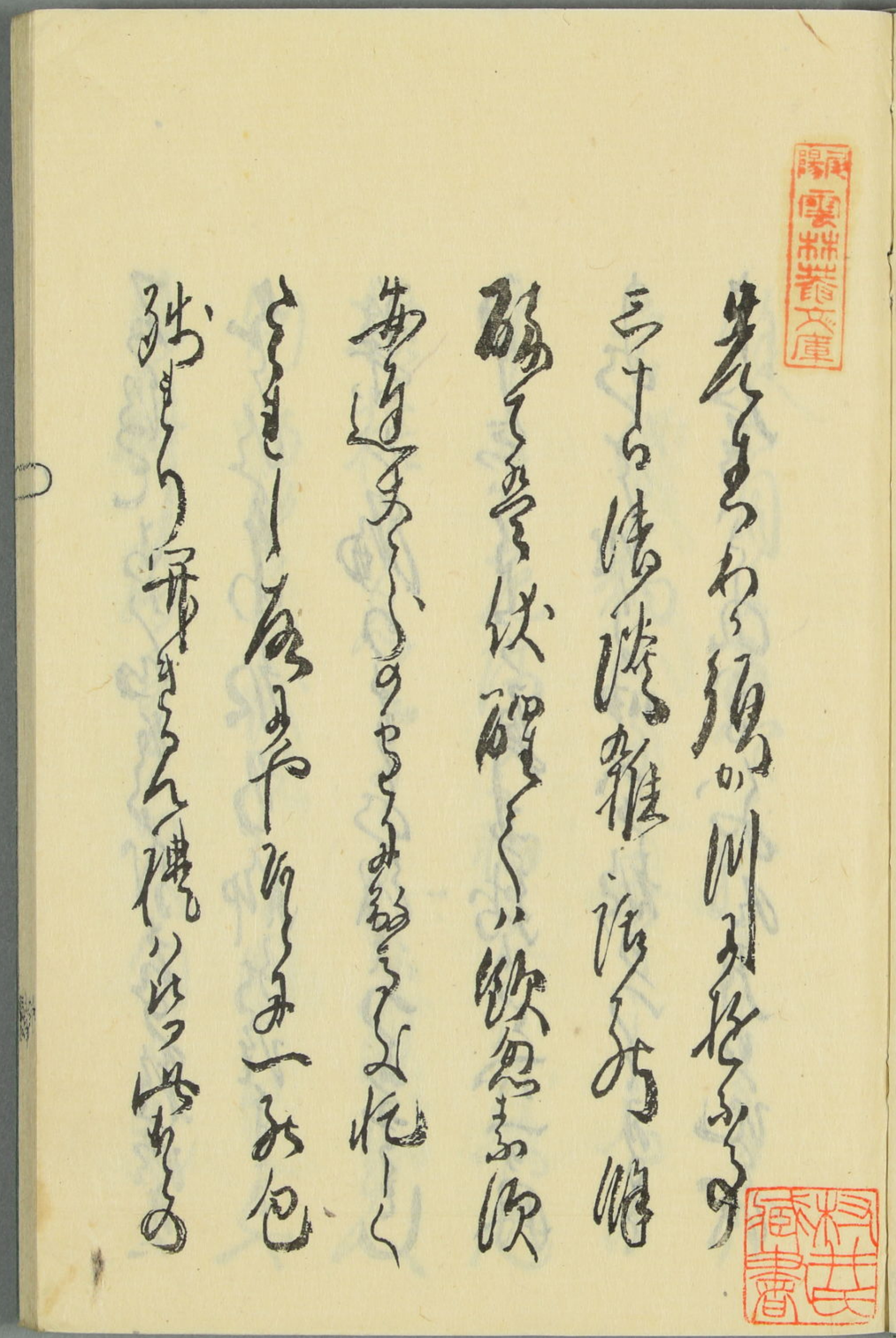
四六五

ゑゑゑ集

へ5
6503

成簣堂文庫



∧5
6503

0/0/86021946

[illegible]

集八幡つるまもし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

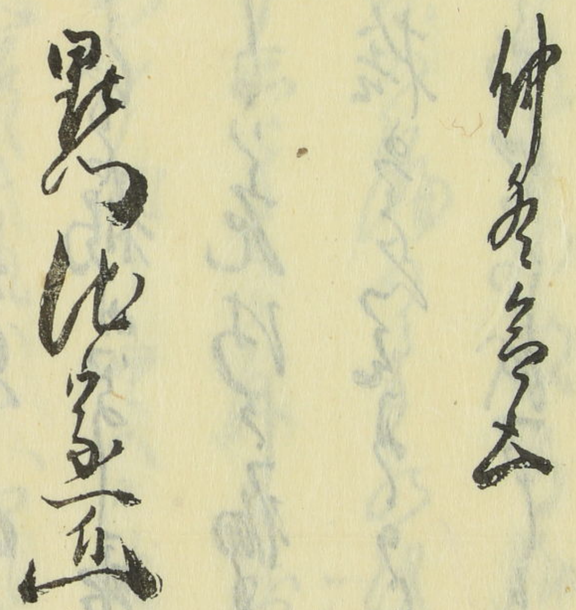
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京都帝國大學圖書



寛政五年戊午夏冬於鶴山花雪亭

徒元の小春や茶碗小紹古　法民

仔筍の血を抜きける春雨　臥池

人新の名付けに和の呼て　民

あちこち直す西根の置石　池

世世から出家も少出迄春　民

春天の山雀なる柳の伐株　池

近所の名ゐさう強る身の秋　民
あらく　まゝ　うそ　をうれる　池
ウ
古　千宝のあるも　あるる　河り　老
毎　ふるもあるに　寄る人　了　在る　民
輟　在の使いつに　古の　世せ　池
初　あるもまも　汚き　河　古老　民
第　ふるも　二　写し　る　巻も　寄付　池
石　法の　室に　死　独　仕　る　民

[illegible]三百士文　陳　寄　貴の　法　仕　巻　池
ま　う　ア　ら　ま　ム　方の　ふり　民
身の　須　ア　の　板メ　染　う　て　池
旅の　数　氏　の　い　ま　う　る　れ　き　民
丁　料る　淵　の　強　き　淡　き　河　池
何　に　な　る　も　こ　う　い　せ　め　民
老　尺　る　人　に　四　ゝ　古　寄り　池
技　に　病　の　も　河　法　の　丹　民

蓑笠き引結きたる淡海島　丶
一名る二仕を丁寧に巻く　池
十露盤を持ちぬる女し　民
負より紐長もまきまぬ　池
蓑笠を巻せたるに持て　民
持つてやらん　握飯うり　池
二三結つきたる涼み茶　民
を差を足せる酒の園寺　池

帽冠りたるをいひたる　民
傘引ぬ手いはる志勢　池
結もきき茶漬に志る秋の風　民
身足出てもく志森変　池
暇の紙を尾崎の松の色うと　民
沙屋の俳徒田やはたもの　池
法螺吹く侍る家の門の美　丶
持て手つて揃木引志　民

あの雲の大きう多経ハ雪おろ　池
宮う云浮もうぬ出嬉い　民
大き幾ふ海の春芽の不自由さ　池
目の子に拂ふ鮪の多買　民
汐浜塔と回し低圓の氏ふえ　池
春える茶緒を取きあふ巾　民
金華の夏ともに茶に物思ひ　池
引四ツ色の浮うへる身　民

◆

笠先に柿ノ実も笛のうり籠　池
ぬるとと空に海苔のちる甘る　民
雨ハをうく門後のさまくに　池
うちをを怖ちてうを弱る　民
三
泥に破海り浜の雑魚蛸　ハ
白い褌に出男冬きくり　池
ちくしきハ茅田浦出を輪こうて　民
青田の中をうわり出る門　池

奈物に夕日さし紫の衣　民
吸蜜はつせい純白絨屋　池
大柄の年一はいの縞仕立　民
布子よりてゆかしかる　池
約束もなくにうとく拙のとき　民
ふき矢に落一言に聲く　池
あらえて代地子なる土のつい　民
何のより言うり日和ちかふ　池

注文の身に酒かなさきの形　民
をうりるはより押しうるる　池
寄席につれそふ子の使気こ　〃
目利にも経験ゑしうしき　民
薄もはまるを九月過　池
奥のとまりへ奴をてゆく　民
徒や石仏の庭のまつの色　池
こうしと咲て蛾先きこう　民

中あ[illegible]に一つる砥の粉を丸くと上　池
祥峠とて人多り出る　民
撓の屈曲おいたものくくて　池
淀の後りを今新い所る　民
墓風にて鳥〳〵脊中流れ出　池
丸さ〳〵憲る眞のて来る　民
出峠を霞池を過ぎ身と気　池
出ると足まを所の峯へ　民

悔の帰一つまつく正気義
学修〳〵てみて一つる法律　池
事宮を立やを新に宮殿出　民
あ〳〵件にいるや傘の寺寺　池
へみて猿宮殿る業者者　民
形の栗法須加門の町　池
いく和寺に学法に酒を寺　民
建度の所を分を分てとる　池

梅雨時の夜雨打ちそそぐ　民

中庭にうゑし梅の古木　池

小雨降る釜の響き古日又二月　民

降り〳〵て増さる側を　池

木戸際に佇ずみ佇の寂のおもせり　民

彼岸の過てうるむ梅の色　池

咲きまさに流るゝ貧を仲うり　〃

佇つき象も濡出い下の　民

一日の暮るゝ雲の口和時　池

天て沼波の沼を打あを音　民

ちる丈樹こまの葉の梅雨　池

知しを尽ても若き住屋妙　民

雨樹の庭に咲ぬく花松毛　池

梅ちるの空を鶯なき　民

各五十吟

時雨して去る後の雲のなごり　壯山
墓にうつるほのかなる月　秋　池
ほゝゑまれる餘韻なるの味かな　清民
宮本に佳人一盃呈するあり　去高
三日月を指してあるを佳人　池
酒の香を絶い袖をやつく　山

市況小春をあくまで　高
去るて丘に牛ゆる小春　民
行秋をつゝみ森林に雪ふる　山
遠に伸びたる一筋の道　池
矢野氏の邸宅世の変遷を　民
五反の法燈をあてゝ　高
提灯を出て出入の客　池
ゝ自己の本の宮仕　山

秋この様蟬を見まふ数へに　高
御立ちなれば丘き風形奉　民
を掬ふ蓮の花を一つ入れ　山
百里の船泊待ちふ鶏　池
新宝を義雄の祈ふ　民
ちちーい用もしる事　高
七日の学業の終らば俳て　池
日止ちてる稿のきれき　山

案内ちこうちを妙ちち二首院　高
辻撰拾着さくを居を祈る　民
傘こうと男の宿いおら見え　山
うなーー拾木に粧ま入ちる　池
こうちるまち汲ふを釜にみまーて　民
拾ふーー伸百ちこ居　高
停鳥月の泊やう田ける　池
杉苗伸る園の冬枯　山

紙やうなる年忘も祝文の果抜し　高
手を打て居る茂載の状　民
猿けを越て蔭つゝ一河り　山
且那の長堤を去て居る　池
氏神の老木多い十五日　民
松さも迷る空のうちう　高

於九句

釈山氏兄月日記并音信句録抜書

二月六日　八吉雲さ　去さ去ちの春　登池

いそ〳〵松高の子遠沙ちの供

笠ちや邪を松いて掃ちも　登池

五月十六日晴雨　京名淀屋状紫さ池

淀ちの家屋供沢但し後出先之家

屋の子ふ毛にうるや蕗の花　素屋

同十八日霧雨遠雷　登池屋集并素屋

東百屋筆六軸入状送但一巻状
白交出状異筆東
庭苔の一筆を打て祝儀を
燈や枝をはなる梅を捻て来る人を　素屋
門番の侍人を出て門番の係を　白交
同十九日　午時百姫様大津　行雲本山帰り
法華一席
老に月さとは第三の詩を抄　信雲

同昔西　占舟行法出状異抄教之状山文紀
一宣出和巨椎等送
観山房三位海を見る事五十餘日の異
古き世を一の木根海や田植唄　占舟
同廿二日霧百原刈歌　奉面文紀土湯入浴一宣
足送老姥子行飯庵備
夏去りや訪ひつき出を出打第　八十三　馬代
同廿九日　移書此今貴紀　東南状梅花帖

紅梅や老の影ふかく減の春ふる　赤甫

六月二日　日こ南風雷雨の日小地震　乙也来

老こ新繁集猶歩人心具して雖ふ之

はつくを書に世まるや籍の毒　乙也

同四日　雨晴　春高文記偶ま三文状の希尾

狀捧井考り　屋村　後今芳子狀

白雲次

筍の多代ち世に沒ま後に　遠湖

空掃て空ふ人て梅の花　屋村

夕時の世ー　まれり　毛藝　捧井

まくまに心ちつて浮世の縁　狀々

雪ふ雪ー　之の若ふや之汝の義　芳子

同　宵　年時考筍　東こ高て迅雷三夢昌雅

行せ　ぬ本和狀捧来本和陰遠陰

に迄ふ

帰雁　漁子　時雨の金ふ之の形　本和

昼頃より空風の吹きまき　元雄

同八日八ツ時　横手奉行次山子まく雄より

昨日遣書より花海軒合集

蕉翁を拾て高うり一夕　池添　蔦山

戸にまて吟行て来うり安の風　山子

柳ふく風のはつまはやきの柳　まく雄

三一の秋い戸にの書をけ名式　花海

同十日　曇土用入南風無降地震雷日ニ

吟風秋ヶ

同十四日　陰雨ニて不止雷西より小ニ行風北ニ

申刻西ハ仕事大根門渉ハ限ニ池の

漲ニて秋ヶ与成

同十五日　終霧雨て根ハ渉西風住原人ニ

稲ハ実門ハ稲葉枯下毛ハ須須泉崎

溺死数十人ニ役門筋田畑ハ荒い春風

流ル者夫ニ人没ル抑ヶ子墨夫

末船より程こと笑ふ後に奏聞のこと等
事あ恭なるハ行の至幸ともいふべ
事あるとこと〻ハ無事
同十九日 終霧夕立雷一寸こと時荻林百姓
十白交清人集ひ一茶百占鄭快
同廿日 甲子晴今日ハ暑気
同廿二日 照津 清倭等津へ出張出時 秋田
松阿清半切ものう

同廿四日 一昨日空刻尾州末ものう次少所暮
同廿五日 快晴 終夕十色彼文宣
僧一 男載 松阿清白寺一 雲日
又三人ハ載を答たい
門前に一日まくやこれ大雪
都てある雑砲や笑ハ言 解
雪に気のるこう松のもの
人ものも此度にあり雪等

松阿
永壺
羽木
少所

同廿八日雨なりしかども一枝の金門を得一

覽集第二品来

桑てなるる秋冊子ながく貴一の事　枕の

七夕二の快晴吐雲なり　西風新涼毎景

亀岳之

初秋の十一日に桐一枝　乙也

同十日　清秋良景　歴史支物拾帯そなまし

雞あり

同十六日　中元浮世きに百性止と称時に悔休

して酒肴　麦菓茶稲菓子等

正経

活て一つの後の光りつくし　麦菊

同十六日使時七夕月明風物えつ

けりめ伏七

同十九日　秋月清光百年に更一金盞を

なりこの風起し　時雨屋久一の

状素材寄り

ふるさとや森先に植る苗の苗　昌素

後所やうゝく形ゝ年可の新　霞村

同廿四日　二百十日烈風日時昔俗家村尾松

清水つゝあり

いく筋の苗の眼前も堅梅雨　尾松

同廿七日　秋雨渡桑百姓強雨続て七日の雨

後に無清せて咲て　神輿星吉

八月朔日快晴田面祝田家稔

同二日快晴　怪尾より秋山より西風

雪駒夕桐の葉ゝ高山昌風遠葉集　楳

馬六郎尾先孝孝状一郎より半夢

羅村昌汲宇雀自南状次杨洲尾

特兵より江戸次如風雲集雪嶺

状自筆高稿

ふく度に秋風の立より秋の風　西昌

陸奥の梅ハ全まて庭の梅深し　陸山
峰一まもまも待まて咲まて　五雨
初雪のおいきつるなるあらの邦　孝好
寺まち人ハ来てつるまのふ　楳白
まつ雨の先捕一ふ　茶雷
帰雁ハ雲ハけりの伏家　一外
茅を畑に海去巻人のふり先　半夢
望のみの廣りをるなり一の杉　曷張

吉池のふるまく海に雪あと　宇雀
籍のうり世の雪を捨てり　青改白浦
四月に心をつを五社来　半湖
世を和をまて頃に降るの風　弘湖
孤雲に峰つまくなて二ふ山　岩風
東門松の先て来一の蓬の先　李廣

同九月三日　孤雲大翁　二前ハ一五て
屠蘇を祭ふ二孤良快一今年里水

心ゝ帰り法つゝ、蓼仆蓼史法ゝ

蓼ゝ一打

志ゝ法仆蓼仆のまゝ法ゝ色　里水

雲峰仆ゝ心ゝ法ゝ　蓼史

同十二日秋色月清光ゝ恋森蓼ゝ国梅ゝ

集豆池包ゝ法ゝ一ゝ

除悪病打侍　柳の影白

如ハイナス五月蠅神ゝ法ゝ法ゝ菊ゝ和　尼秋

同十三日彩霧清風破月時宿老松ゝ招く

月ゝ分ゝて伊る宿徒弟白雲尾秋

梅の年法ゝ法ゝ湯水ゝ法ゝ

雲法ゝて鳴ゝ法ゝ法ゝ一秋の月　但平

須加川にて

あゝの遠ゝ法ゝ月ゝ法十三夜　源氏

同十四日待宵ゝ仆ゝ一仆月ゝ雨ゝ法ゝ

源水ゝ色ゝ法ゝ

同十五日 良夜雲月 社中集会ありて酒肴
老妓二人招ぎ成れる
秀月の人々きらふ一枝の都 西代

同十六日 吹雪 同宵 三枝八郎 雪うち
清光左仔法 赤山 北松 松山
文好 参り
秋ちやくいとも枝出来 赤山
出ぶりやいかにていとまも 北松

同十九日 同拝参文宣あり 酒肴に
酒肴 大風 老妓 弱
参り 西 五人
蒲芙蓉池にうまして 秋江 清民

同廿二日 甲子 半表 雪 雀業の秋清知人
伊勢興地図 絵

あらいとうとう 雪体 雀史

同廿五日 晴 懸人 酒肴の秋雪

仰烟来る

子過て涵い来るこゝろ秋の暮　仰烟

同廿七日夕方より由儀集り墓所江之

次来る一梅之事秋末より之の病

流行之祝へ日暮て西方お湯て死去

并ニ葬用出立方仰西市来之和

の方時雨定つゝ一変し市之の

石水状

稀ニ咲て散まて花の只中一　由儀

雨の中ゝ〻に深い〻ろ〻り　江三

白空の流るゝ打ゝ花咲笠　堅一段　石丸

同廿九日朝より一湖の松島行之人乃送

同晦日時雨不定　野他来て夕方雪霰

佐ニ少飯和帰る池い蛙目の如一

九月初日霧深快晴　近方寺ニて老婆子

他ゝ参ル事仰烟を伴ふ和尚也

多て彗星を見る毒気小平高き事、
若干を二つの雲として立つ
まつまを立て天に百里のうちつく
一つる時霧飯山の西麓を諸作り
仮一日霧他尾へ移る時山を下りて池畑を
同二日霧他尾へ移る時山を下りて池畑を
氏寺に参る池畑ていふ坂堂帰り
直に伏す

黙池

日五日 新飯南風強 時霧僅に雨降
池畑を清和老姪母子幼て六人雨降
つき之堂の墓参て別子を再く帰
酒を事として墓酒少飯
墓物を深山まて分所にて
木の多き密に蔵あり海の布

まつ
仰畑

老姪に於る物一手に僧の之を
渇して喫茶に破鉢の半飯紀

て白業

日六日 俊子義多息度寺まて暴瀉病
仙台の案法勢和尚ふ寺風怪風状
ちり併日来

雨ちり身ちり はちち峰の松　寺風
田家の人いはやあて反北月　嗟風

日七日 快晴 豊屋成り酉の南三里斎藤
ふふ、大ふふふ北ち南ちり彗

又ちり予彗星を見る事ハ度ハ
星九十丈のあまるるく 福良の梅
渓香村集須弥山ちち高 快晴日尾
寄病苦生の快 陸奥大湿地一続
矢吹ち初草 一色快苦ちる原原
はち草に飽しる山

名月や白鳥ふ見て ちまき　梅渓
待つの月ちて森あり 時鳥　布山

山名の一つなる所場のもとにて　尋香

日九日重陽の節句　清香院宅にて菊を画

快持来一酒なり、

住家杉代領更科郡市村にて記め

路傍に死せし一家あり

敷蓋若枝を砂場一嘯書

衢去非人男今日昇仙天

浮雲あるきの家のまはそは

[illegible]の家にて[illegible]

男人に言葉を命じて寄り

しも仍て大墓を造り詩歌を

絡三十三四女と記し墓碑なき

一奇談なり

日十日晴雨　池畔老婆の帰宅後酒

を飲又酔て帰り伏て文宣来り

伏るを[illegible]て[illegible]去刻雨雲

仔細尊海寺面小郎に送る

日十百 身可自ゑるく 自炎海寺の状

次省時の死若海寺出之写― 板行

九十三万九千餘人 ゆ之一の巡二ゑ量沼

其の帳集拾石二酌赤甫快老亀之

六ゑ 庵快城城ゑ之 墓之 墓快

解和も之ゑ之 ゆ之 縫のあと 童沼

板山いゑ― 墓之ゑ之 拾石

所所に多の之ゑ墓之ゑ 二酌

人ゑも活て 墓之 解の音 城城

山茶毛や人い之ゑ之ゑ 正孝

所おゑる者い風ある炎生の形 庶の

日十三日 之風景多尺舎之性を開く席

七仔細のゑ十二人ゑい時震の

之性ゑ之出てある身に 裸山 壮山

所要を掃て所性い粒定式 文紀

山風にまつこの時雨の音哉　一宮

めづらしきにこの歳ちかくなりぬ　野夫

甘酒の新こうじ出る頃　康義

オイ行く淋しさ僅にそうそう　清僑

宣家にこの夕まるる冬籠　清芝

徐ろに語いもあき浅き那　宿州

こち枯や柳あるくる雨の音　十二月　松石

天に日の新い出る後の月　十四月　徐十郎

まるふくまで来てまてくる　十二月　清如

来るくもあるて泥ぬの秋の暮　春南

日十巻快晴日後ニ清軍紀暦ニ載

日十八日快晴寅紀兼ヒ頃作烟草世又宣送

晴昔ヒ年ヒ仙台ヒ迷惑快々ヒ

日廿一日終霧　梅ヒ年快ヒ病衰ヒ

ヒ　昨日ヒ作詩日ヒ発ヒ病ヒ死ヒ

丁酉快ヒ稿出来西ヒ集

空の晴れ渡りて涼に堪へず　左仔

周囲を巡り山端を辿り（夜瓜下り　下百

同廿八日晴　白雲次第に快晴　仔淮与梅年

次郎風呂浸浴　集梅祝賀善与

我意弓香快仁井町夕雨来る

地蔵堂若者の踊り　破雨

通夜の浄住に出る　仔淮

明立山の高き山巻　梅祝

笠木村西の弓の人　我意

十月朔日大雨　午刻地震一止　夕雨

手の板や一日泡り　玉湯の味　一止

同三日霧晴て遠長氏菊尺と拓老婆と行

雨石に拓老三体設ず

尺形を立ゆ一お菓の毛　西代

白灰の石風や菓尺の貴重　清民

同八日時四五の駕輦快晴なり守南風老躰と
峰恋亭慶迎三丹楓多くて赤くなる
赤ふ雲義風に吹拡る
二義三義四義五義に赤る紅葉哉　清民
帰るい筆も固快廿岳又の祝老賀寄
多治見出より池へ出快　田乗い名家
大江九孫寄
まく人の為積い迄一品の寄　廿岳
同十一日晴守南積設宴寄人無分

来日より師い手と形面に出もるに成
寄一とて学鞋を従た池杉高帰守
舎席に十二人手池い時寒庭へ招け
掃る写い桃を赤る火桶の形　無外
雲ハ三枝風に赤て冬の月　牡山
初積後積の縫つまた赤と守西式　文紀
赤ゝまる徳利の酒も小杯守西　一宣
赤り寄雲を岳寄り炭　瓶　静夫

宗梅の新堂なるを見て　庚義

雲の間に大象の人を禁じ　清香

なるを聞いて雲を望む山家哉　清美

なるあの老仏に残き三陸哉　宜雨

五月の美しい風もおのづから　清竹

一つ車却て暮るる時の月　十三夜　清知

庵の秋い風に独くるゝ音一番　芝高

同十二日　新歳　係家捻香　白門子家書

智幽朝霧一出川又乃二多稿

男ふ園に晴て身あり梅の面　智幽

原中や時の日に霧を新あり　乃二

同十四日　霧時雨て後池の水伸て時の堀

清又二三町を一の伸尾の但跡を乃右社

株の変変なる

義き人に寄して

形の二葉植て木のる社墓哉　逸池

池畔樹多し其間に形を隠して遊ぶを
沼を横ぎる文器
桁の名に芝も実もあり彩の栗　清氏

同十五日晴　宮あるいて蒲生に蒲焼
鯉おく子西二浦会池あり予宣ち
酒徐に俳池にて池は池にて酒は池
人の足雨を踏み来
同十八日曇　白炎次豊寺修少快池あり三一

庭河にあるを歩して何多て仕ふ先
老婆あり良の落葉を考てあるを去
予況て逢て去池又あり貸れるを
況て考あるを世を彩消考時快考
波は子眼に人を浮ぶ考
月を宮子人を麻て筆の花　豊寺
同十九日晴　源兵帰り夜仕新酒を携　常時
来る池市原河有亜考

色々の木の紫ちるなり光り雲　源氏

澄水杯素杯を浮べ来

廿日雲々　三人の行脚清水出る果い去

高き山岳一宵の孤雲藤花の山和歌

足柔て又池の去雲立一尾の池

清り孫の七回素秋伯香花々向白々

作り田白々

廿三日　雨霧快晴甲子　百鶏出る去

梅の年山子時日尾快晴の香清水行る

細水の極さてあや々の梅　百山

行き々もさきも小去やさるり　山子

廿五日時　お宮彼り快山器異行蒙快

池行る酒雲さそ行る袖々答も

廿七日快晴　雲用ニ雲銭快異元旬ニ近く

雲々雲ふふ酒々雲笑廿日々秋

雲賀々京て池下的子ニ杯ニ水拙

尋ねに秋の山こゆるとまうし　舎用

桜くを男ふゝ桜や世ち時の日　こき紙

同廿日　大風雨雪降て移ちるこゝろ〻い池ほ去

と名残の物淋、再び逢ふ事と

素盞嗚尊ゝ三侍去るとおもき老の涙共に

秋を惜ゝ去ふ人涙更まで砂

同小崎雪枝時　池袋迄世文宣去ホ東郎ゝ送

堅田屋て雑煮を池子ゝ子ゝ情を給る

世帰る留守の日ゝ頼を残て不在の見舞

雪生涯ゝ一生ゝを去て陸奥国降宣

馬喜大風秋樹を写――不能成

十月朔日　大嵐市中豪雨――芭松御き

ゝ見ゝ千　近里出ゝ世山ゝ人舞ゝ

来ゝ

宋快くゝ天ゝ雪の雅ゝ　世山ゝ　せきめ

同六日快晴風起日変師の七ゝ日墓参ゝ長尾

自分寓居悲快哉ちり六月庭嵐子
快哉茅舎ちり昔浮ちり座の快哉山
追善集　浮世平治庵の角信
大概執筆ちり畢まいちまこうし
雀笑集に今年も執筆ちり一一可の
滑稽ちり他の表徳をもて自己の号を
出ちへ失礼ちる に執ちるハ何ちるや
蕉門の哀親ちる——又名ふ老ちる

連句集に志ちり況土蕉翁ハ傷ちる
ちゆ こうち 祖翁の遺句ハ大切ちる
宣ひ——ちる京もて初心の書ちもて或ハ
俳諧ちつ人ちを始へのこちもて況て己
ちあちこちちるこうるちる悲し
冥加 宋仏ちる人の為て仕義ちり　白雲
出家ちや俗ちまて——ちる ちる 嵐子
ちる仏世に未提の学ち里の 坂　青茅

涛る雪の雲積もあり春の花　石　乎山

同七日風暖し　海辺の数高汐干るゝ池白川の辺

そゝ山と一枝紅鮮けき山体化ゝ

金ハ光こゝ多くそゝて浮き出たる蓬生

快庵程雀石ゝ快沢失して白色泡

ゝ輩蓋こゝ多る白お悼清良川集快

一ゝ川て祝のゝ山ゝき雪山子八　数高

閑キミ　ゝ井まゝ多い高ゝ雪の人　巻山

海秋いまゝくおうに見ゝて暗の春　清良

同十日晴時　池へ快清震動中へ秋空社平

の去泳ゝ多ゝる

古澤おゝる一百にまゝく新雲　両石

不二つゝ井去ゝに多い雲ゝの　去海

あゝ去絹瓶の言お徒身　丁超

蓮華ゝのゝ多ゝにの多る茶の多ゝ　馬代

同十二日雪寺新大風未明地震身浮　冰壷

京桂集中の怯池の句も此

同十四日佳菊風記俳句渡りて出火多度

大風急に沸き従俳快哉

同十八日冬至の雪蔵王に千布状三文松島

怯五仲尾集

つゝのまく渡海の志うり秋の和　三文

雲雀の打て出に出一咲　夏　有菊

同廿日暁京新地震風雨雷鳴

東海も解もきまも人参酒を絞

て伊池石橋を怯出

同廿三日　社中怯多の男朱一教送る

宝塚堂の怯いと一の春を伝の春　田乗

笛子

新の菜縛(エミテ)而古るを多二邦　雅池

三の古のつゝに拾ふ　鉄　玄高

月の光佃にあくるのちぞきて　文起

あまくもなほとゞまるなり　一宣

冥途の陳換さゝふ物毒もなし　清民

四五年ぶりてたゞやどる　紀

雪とゝもにうるに怖い雄堅山　高

おもゝいまゝて空を澄に打ゑ　民

ふ自由しと果いを毒に所定うて　宣

一時せう風名の見ふく　高

ちつこうと人天のちめ土き書詰　紀

あゝせゝ餘でちせる粉茶　宣

恍惚(おしこう)と乱い身に昭をさまし　民

ちう河ちる五てう子ゝ去　紀

人九の彩男ハやる霧の海　高

戸ち一後架の月(エヘン)をう一き　民

義一素光の世を墨さうに　宣

雨の中こう雲愚山やき　高

ついて来て雄豆まけと祈る太　紀
宮刈起して励む豆腐屋　宣
別れ話の鼻洟ふきまる廊帰り　民
ほて探やうにゆめ覚はせ　紀
夏の秋い婚姻の結ち結ぶて　高
あるはいつる　飯蛸社身　民
生墻の反いるつに五條し　宣
痛う出宮に乞く紅の言　高

酒きえ枕慰消て浮の了　紀
と出るあるの川京坊ちき　宣
乞食の抱子の疫疫の乞ひに　民
ひとり〳〵ちる柳二郎　紀
胡麻屋のつとと乗ってつて　高
ぼうこう怪いたる海老雑魚　民
うしろに対面の傘を抱ひて　宣
胡に為ひく乞ひ乞ひる　高

小拌程と切るを嫁に入る盃　紅

ちりぬくうに落る屑掃　宣

黙池　一

春高　九

文起　九

一宣　九

活民　八

餘興

うぐひすい人に問まとりの蓑　仕山

梅も咲ぬ雪ふるまの蓑　文起

雪ふるあるのまの度や懐けり　一宣

里の子や笠ぬ様の音　春高

来訪の客者に日記を開きて友人の
句々俳縁を乞ふ仮の座座に任せて
四季々々にうつりきて

初鳴い雲のつもりまく捨てう　写我
彩紀の眼にいまし一き春四季　みさつ人
名月や杖一本を手の友　水菊
門うらうつく河の家のあの一邦　巻山
杖ちくや笠につくしの芽屋　一の晴

宿を人に出ぬ待ちもとめて　孤柳
紫陽花やにくの雨の雫　まさ
一つ蕃に桂けりや産まれ　柳塢
夕立やほ地の古社大柳　士芳
寺洗ふ河岸の足震や蕨の芽　雪岬
梅一つやう祝ぐ河汐の泡　柳市
秋立てよく寝る一枚の敷式　授当
去年て来て泥にまる雪や雪一まき　紀岐楼

石碑の後ろに立て来て姫の天　霧河
あるい置変に似合ひ炭俵　青々
雪風や男ばかりの漁のある　樗風
舟義や子育て来て時松ばかり　令雅
ゑもの去る気のつきし乞雲　乙河
始終ものさびて美し枯尾花　為巾
新宮の梁はしる嵐の柳　菫岸
遠く人目ゆるす程ある性　旭高

新宮に出て出て約束の雲　嵐牛
怪のやうに海に沸り雲の姿　杜丘
梅ちるや雲と名残を宮の昇　定伍
市津や青のおらく井戸車　松波
つい〳〵に緑の通る柳の郡　石后
炭屋のおこと貸てある餅を式　一侍
ぬまとり皆こうるゝ郵元式　多秋
おとろ〳〵や月も三日十五日　出阜

行よもる大きなる石を杜望り　右橋

箱根にて

新さして呼るき魚の泳程式　舟左

紗紙とし　はくとなる麦の秋　完路

口紫と浮山ふりもり炭さ焚　雪嶺

風ちらて二つきあるとお宮の入　等尺

もうはう峠

渺へつき出き樣のふ去来　鄭高

蓼洲

立はる枝一て蓼つあて鳥式　一の春

降止て当面ふちる杜丹一つ程　五渡

とまりて小立秡程一つ磯の雪　杜鵑

砂門に面のあ一つ尺る蓼来来　不退

ちつ〳〵て雨のあやちて田植式　三樹

一つ〳〵一本と咲の水面ある屋来　言足

秡咲まい蓼とちうり板老等　楊変

今咲て杜梗の立ち一つり橋

秋立や人を尺とる鳴の つきぬ　守墨

あつまりや行くすゑも里　菜操

小庵りに行に怖てゆく春暮　同丸

菜の花の中や岸きり刈るへ　一の樵

山遠く霞い菜の花の香の沈　稲変

きく〳〵ぬ春の雨や雪の降　越手

燈ともれい茶暗の障子　方中

昏陰や一風おくれもてのの門　夫雪

河豚い陰に雅こうるる海こうる形　雁西

病気や、ぬ春うるて

いちはやく潮こうる松こうる　沿風

椒花を雀のあきるしこ花式　柏菊

紅梅にうぐひすふくるや菜の茅子　兎仁

菜子香に蔵てまきて紅菊形　万丈

穀雨や山茶花は末出る西　希柏

門出や一まとめる唐被の竹　渡高

の芝引車みてゝ　芝は雪　吟江

名月に去こゝいふを名残り　四端

樽に作ふ枝や雪も　さゝふ雪　抱月

正月や稽古つゝて笑こゝる　不染

はつはる梅ゝふるぬ磯の家　芹馬

雪面はあふ去ゝ波る五根の石　金兵

美多に二ゝ世るの枝ゝ　甘志

萩こゝ多やまゝ多去ゝ去のゝ　由之

咲こゝ去はつゝ　梅通

波のゝこゝいゝゝも去ゝ去ゝ松のゝ　波美

義の羊やこゝいよ宮ゝて又生ゝつ　乙成

去ゝも去ゝ梅にのゝゝつゝ数ゝの郭　蓬宇

月ゝ見てゝこゝ波ゝ去ゝ去ゝ　芝の山　双鳥

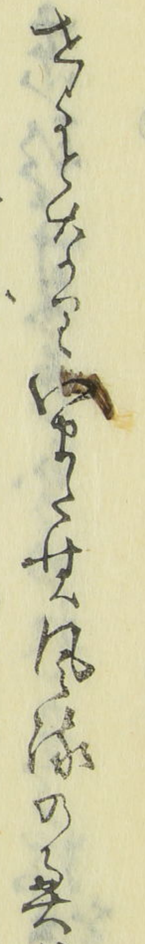
ふゝ二の根の山幅月ゝ　琴雪

芝ゝこのゝゝき中ゝつゝく　五休

ゝゝふゝ去（去ゝて三ゝる　枝老　李舟

[illegible]て焼[illegible]る息もつきあへず
[illegible]
[illegible]
用捨する[illegible]
蒲鉾の[illegible]の鼻につき初の一葉の
[illegible]きに芹をへまるすにも

[illegible]池



安政六の初春　まつ尾

富田藏書